

〈論文〉

〈Paper〉

## 江戸時代中期の新町宿に洪水被害を与えた 神流川下流の河道変遷

The Channel Shift of the Lower Kanna River Flooded Shinmachi-juku  
Frequently During the Middle of the Edo Era

新井 健 司

ARAI Kenji

上武大学経営情報学部, 〒370-1393 群馬県高崎市新町270-1

*Faculty of Management Information Sciences, Jobu University, Takasaki, Gunma, 370-1393, Japan*

受付 2006年10月2日 改訂 2006年11月9日

Received 2 October 2006, Revised 9 November 2006

# 江戸時代中期の新町宿に洪水被害を与えた 神流川下流の河道変遷

新 井 健 司

## I はじめに

群馬県と埼玉県の間境である<sup>かな</sup>神流川の下流は、昭和の初めに大きな堤防が築かれる前には、頻繁に河道の移動と氾濫を繰り返してきた。江戸時代に中山道の宿場町であった新町宿とその周辺は、神流川の洪水に度々悩まされたという。

本稿は、江戸時代の新町宿とその周辺地域に洪水被害を与えた神流川の河道が、どのように移り変わってきたのか、その実態を調査した結果を報告するものである。

## II 調査方法

調査には、群馬県高崎市新町および埼玉県児玉郡上里町の神流川下流地域に関する古絵図・古文書・地方誌・旧版地形図・空中写真等を使用した。これらの諸資料をもとに、江戸時代における神流川下流の河道位置と水害範囲を年代別に相互比較し、現地での地形調査・聞き取り調査の結果と合わせて考察した。

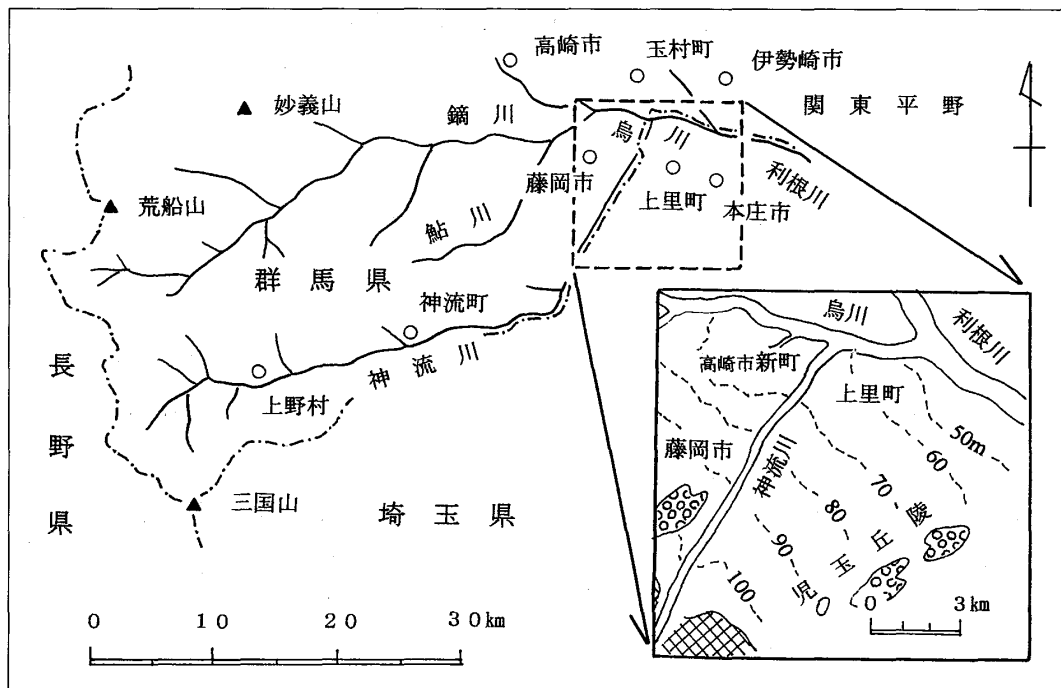
本調査の目的に使用できる古記録は江戸時代中期のものであり、本稿で扱う時代は主として江戸時代中期である。

## III 神流川下流の地形

神流川は、群馬・埼玉・長野3県の境、<sup>みくにやま</sup>三国山(1,828m)の北斜面に水源を持ち、支流を集めながら奥多野の山地を東北東へ流れる。さらに、<sup>おにし</sup>藤岡市鬼石で北寄りに向きを変えた後に<sup>からす</sup>関東平野に出て、高崎市新町の東で利根川の支流烏川に合流する。

神流川が平野を流れる部分には、鬼石の浄法寺付近を扇頂、烏川・利根川右岸を扇端とする、約60°に開いた扇状地が形成されている。現在の神流川は、この扇状地を北北東方向に延長12kmの直線的な流路で流れている(図1)。

図1 神流川と下流の扇状地



下流の約12kmの区間は扇状地を流れる。

#### IV 江戸時代の神流川の河道位置

扇状地を形成する過程で、河川は広範囲に河道を移動させる。神流川も過去には<sup>こうしんやま</sup>庚申山の残丘の南を西に向かい、現在の鮎川水系に入ったり、藤岡・新町の両市街の間を抜けて、<sup>ぬくい</sup>鍋川・温井川の水系に入ることもあったであろう。一方、東方へは児玉丘陵の北側まで広く河道を移しながら、大量の掃流砂礫を堆積させてきたと考えられる(図2)。

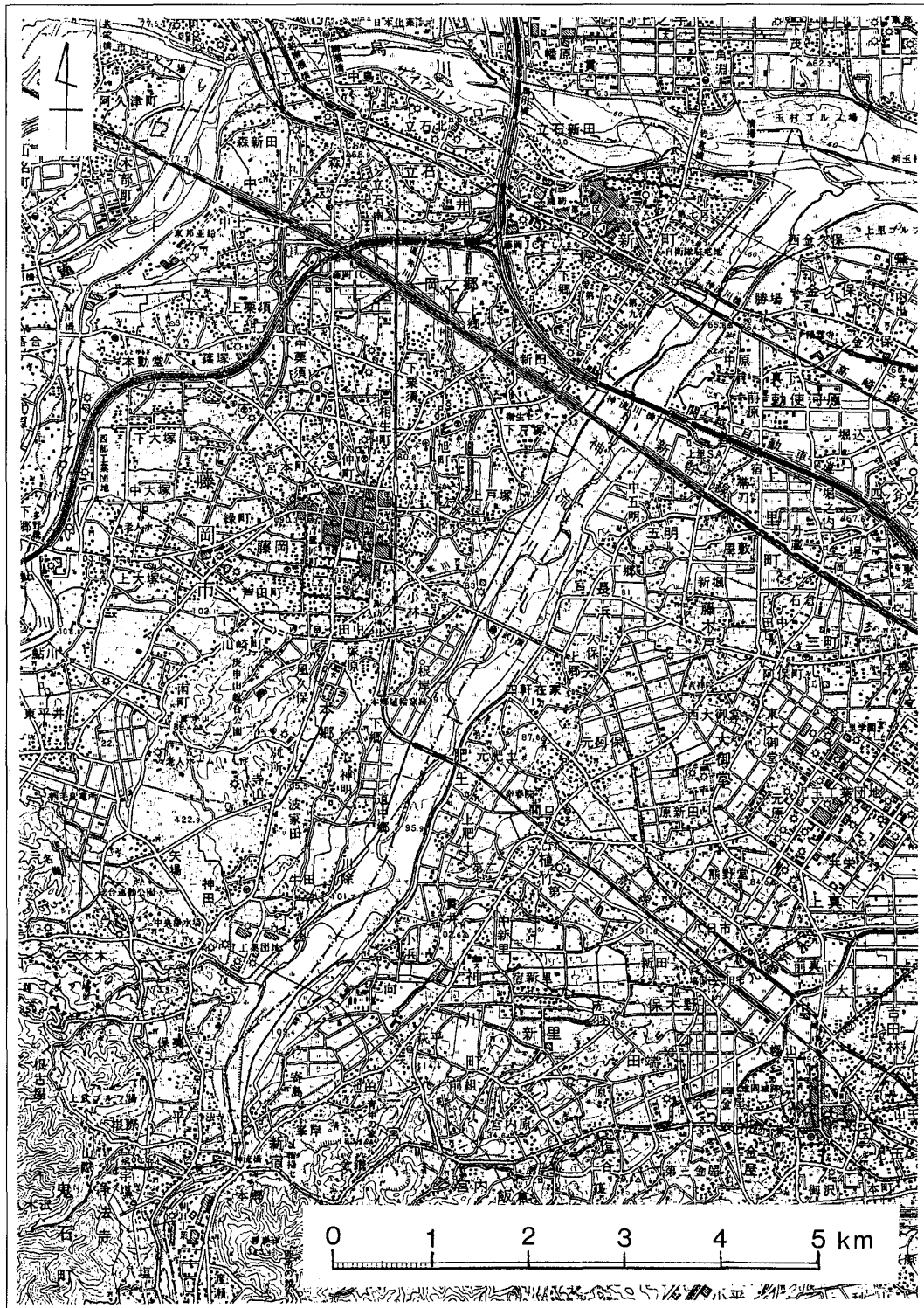
歴史時代の神流川の河道位置を正確に知ることはできないが、8世紀の行政区分で、神流川下流が上野国と武蔵国の国境の一部とされて以来、ほぼ現河道に近い位置を神流川は流れてきたと考えてよいであろう。

しかし、神流川の下流2.8kmの区間で県境が群馬県側に寄っているのは、河道が現在より西にあった頃の国境が、その後県境に引き継がれたためとされている。またこれより上流の埼玉県神川町の<sup>ひと</sup>肥土では、江戸時代にその東側を神流川が流れていたため、上州領であったという(藤岡市岡之郷・郷土誌、1996)。

このように、国境が定められた後も神流川は現在の県境から外れて、ある程度の範囲で河道移動を続けていたことがわかる。それでは、江戸時代の<sup>ひと</sup>新町宿に度々洪水をもたらした神流川は、<sup>ひと</sup>新町宿の近くでどのような流れ方をしていたのでしょうか。

神流川に関わる記録が<sup>ひと</sup>新町の歴史に占める割合は、極めて大きい。それは、宿場・渡船・

図2 神流川と新町



〔国土地理院発行、5万分の1地形図「高崎」図幅〕

河岸などの交通産業が支える国境の街にとっての神流川の存在を思えば当然である。しかし、その歴史は同時に、暴れ川として知られる神流川の水害との闘いの歴史といっても過

言ではない。残された記録から主な水害をまとめてみると(表1)、このことがよく理解できる。

表1 新町における神流川に関する歴史

西暦	元号	記 録
1561	文禄4	毘沙吐原、金窪村から分村して、毘沙吐村となる。
1568	文禄11	武田家朱印状に先御判之地毘沙出川合両地の地名みゆ。
1582	天正10	神流川原で滝川一益と北条氏が戦う(神流川合戦)。深谷記に「ひさいと原」みゆ。
1612	慶長17	藤木渡しの河岸問屋が割符の公許を得る。藤木渡船始まる。
1617	元和3	川窪信俊(武田信玄の甥)、金窪・藤島・黛・久出(毘沙吐)外の地を領す。
1625	寛永2	毘沙吐村に問屋四軒公許され、藤木河岸が成立する。
1655	明暦1	毘沙吐村の検地がある。
1659	万治2	神流川大洪水のため、新町宿内に濁流が流れ込み、伝馬屋敷が崩落する。
1678	延宝6	大洪水のため、毘沙吐村藤木河岸が壊れ、河岸場を黛村に移す。
1700	元禄13	笛木新町・勅使河原の境界を神流川中央と定める。
1715	正徳5	神流川渡船場が移ったため、目印の燈籠建立願が出される。
1717	享保2	戸塚川が氾濫し、そのため新しい川ができる。
1724	享保9	神流川大洪水のため、堤防が決壊し、川瀬が変わる。
1727	享保12	神流川・烏川が氾濫し、見通し燈籠が流される。畑の崩落・土砂の流入あり。
1737	元文2	神流川の大洪水で大被害。濁流田畑を呑む。新町宿役人、復旧工事方法を書き残す(従来の「箆出し巻き箆」より「手堅巻き敷き箆」と「乱杭」などが効果的)。
1738	元文3	6月末、神流川が増水。笛木新町では、前年より行っていた工事箇所のうち75間(約135m)の敷き箆や乱杭が破壊され、工事現場が本流になる。洪水が静まった後も川瀬が少しずつ宿の方へ近づき、田畑を押し流す。
1738	元文3	笛木新町、神流川の氾濫と水防工事の状況を絵図にして、代官に届ける。
1742	寛保2	神流川大洪水で新町宿内に泥流が流入、中山道が堀割と化す。死者54人、流失家屋97軒。水深は神流川で4.5m、町中で2.4m、田畑で2.1m。藤ノ木河岸被害。
1745	延享2	落合新町、土地の状況を絵図にして、代官に届ける。毘沙吐村と境界を争う。
1748	延享5	神流川満水(1月)。
1752	宝暦2	笛木新町、神流川の氾濫と水防工事の状況を絵図にして、代官に届ける。
1761	宝暦11	笛木新町、水難(2月)。毘沙吐村と境界を争う。
1762	宝暦12	金久保・毘沙吐・笛木新町の間で上州・武州の国境論争。国境が川の中央であることを前提にした上で、三分境の皂莢(サイカチ)の木より北東を見通して、烏川の川端に境杭(「三境定杭」)を立て、それを基準に国境を決定。
1781	天明1	神流川土橋修復につき、三右衛門費用百両上納利金をもって、修復・川浚い・無賃渡舟通行。
1782	天明2	毘沙吐・金久保・勝場3ヶ所神流川筋変動につき、訴訟。神流川満水につき、下河原・陣場御普請、毘沙吐村川除普請あり。藤ノ木河岸の対岸に新町河岸できる。神流川メ切普請で、毘沙吐村他と新町出入り(5月)。
1783	天明3	浅間山大噴火。烏川大洪水のため大飢饉となる。宿方降灰30cmに達する。
1791	寛政3	神流川洪水により、毘沙吐村、土地を流出する。
1795	寛政7	当時、神流川の川幅、平水時10間(約18.2m)。長さ10間、幅1尺4寸(約3m)の土橋あり。増水時に土橋は外され、人足によって渡る。水が引き川幅が20間(約36.4m)以下になると、渡し船を出す。歩行船1、馬船1。勅使河原村が担当。
1802	享和2	6月末、烏川・神流川氾濫。落合新町の人家半数、10町歩の田畑が浸水する。堀割りを作り、滞留した泥水を排水。伊能忠敬、翌年にわたり新町宿を測量す。
1805	文化2	国境出入・神流川洪水につき人馬差出年延願を出す。
1805	文化5	神流川渡船場所に見通燈籠建立願を出す。
1809	文化6	伊能忠敬、新町・金久保間を測量する。

1815	文化12	神流川両岸に石燈籠が建立される。
1816	文化13	毘沙吐村・笛木新町宿の村境再検分。
1819	文政2	毘沙吐村・笛木新町宿の地論裁許される。
1822	文政5	神流川・烏川、川筋移動により、毘沙吐・新町・角淵の間に境界争論あり。
1824	文政7	2度の洪水があり、家屋多数浸水する。
1829	文政12	神流川出水にて、毘沙吐村新町地内借り、川除普請あり。
1846	弘化3	大洪水で毘沙吐村の社寺・民家・土地の大半が流出。家屋24軒、土蔵6棟流失。新町側への移転願あり。7月、神流川本庄方面へ抜け、野や畑が一面に浸水。
1847	弘化4	大洪水で河岸町の社寺・民家が流出する。弘化3年の川欠箇所復旧工事成る。
1848	弘化5	1月、神流川洪水。毘沙吐村川欠。
1848	嘉永1	毘沙吐村の新町内への移住始まる。
1852	嘉永5	7月、川々出水。
1856	安政3	神流川が氾濫し、毘沙吐村被害にあう。4軒流失。
1857	安政4	毘沙吐村の新町への移住。神流川河岸に常夜燈を再建。
1858	安政5	毘沙吐村より諏訪神社を遷宮。神流川、藤ノ木河岸前より本庄方面へ流れる。
1859	安政6	洪水のため米不作。酒造高が半減する。7月、新町宿、上入口より家13軒流出、烏川堤南を流れ、3人死す。宿は川同様に激流が流れ、上州屋佐惣次の家は下町の高札まで流れる。移転した毘沙吐村の家も8軒流失したが、元の村には不思議なことに水が上がらない。8月にも出水。
1863	文久3	神流川の洪水で流出した大量の土砂により、毘沙吐村が河川敷になり、黛村に移転。藤ノ木河岸も全壊。
1868	明治2	新町宿、毘沙吐村、岩鼻県に編入。
1871	明治4	廃藩置県。第一次群馬県成立。
1872	明治5	笛木新町・毘沙吐村・金久保の境界を定める。
1874	明治7	笛木・落合・毘沙吐・角淵の境界論争裁定成る。繫杭38本を立てる。
1876	明治9	第二次群馬県成立。新町は群馬県に、毘沙吐村は埼玉県に編入する。
1879	明治12	毘沙吐村、新町に転籍し、川岸町と改称。
1888	明治21	笛木、落合、藤木の旧字名を廃し、新町と称す。
1891	明治29	神流川見通し燈籠、高崎市大八木に移る。
1910	明治43	大洪水により、新町、大きな被害を受ける。
1914	大正3	暴風雨により、川岸町の堤防決壊。
1917	大正6	町名変更(区制施行、1～7区)
1934	昭和9	国道17号、神流川に永久橋竣工する。
1935	昭和10	県下に大水害。
1940	昭和15	陣場(現陸上自衛隊新町駐屯地)で、応永の板石塔婆2基と観音像1体発掘さる。
1955	昭和30	8～10区を追加
1961	昭和36	新国道17号線、神流川橋梁－新町駅間竣工する。
1965	昭和40	神流川古戦場跡の碑を建立する。
1969	昭和44	中河原、下河原、水押地区土地改良事業完成。
1978	昭和53	常夜燈、ライオンズクラブにより復元。

本年表は、主として以下の資料をもとに編集した。

- |               |            |            |
|---------------|------------|------------|
| 1 新町町史        | 4 渡辺三右衛門日記 | 7 田口 基家文書  |
| 2 上里町史        | 5 茂木吉三郎家文書 | 8 茂木藤太郎家文書 |
| 3 新世紀ぐんま郷土史事典 | 6 内田フミ家文書  |            |

古記録には、「川欠<sup>かわかけ</sup>」、「砂入<sup>すないり</sup>」などの河岸浸食や洪水流による土砂の堆積を示す言葉、そして「川除普請<sup>かわよけふしん</sup>」、「川浚い<sup>かわさらい</sup>」など、水防や復旧の土木工事の言葉が多く、増水による洪水とともに河川の決壊や河道の移動による土地の消失に悩まされていたことが伺える。神流川の烏川との合流点付近では、河道の移動に伴う村境の争論が頻繁に起き、土地の流失による村の移転まであったことが知られている。

ここでは先ず時代を遡り、新町では史料が少ないとされる中世以前に、ここがどのような土地であったかを考えてみることにする。

新町では昭和15年(1940年)に大字陣場<sup>じんば</sup>(現陸上自衛隊新町駐屯地)で、4面の板石塔婆が発見されている(高崎市新町公民館蔵)。有銘の2面のうち1面が応永2年(1395年)、他の1面が応永8年(1401年)のものであることが判明している。

陣場は国道17号線神流川橋北の左岸にあった地名で、天正10年(1582年)の神流川合戦で、陣が張られた場所として伝えられている(図3)。陣場で発見された板石塔婆は、摩滅していないことから、他所から流れたものではなく、現地に残ったものと考えられ、神流川合戦の200年以上前から付近に中世武士が居を構えていたことを示している。

陣場は周囲よりわずかに高い微高地で、少なくとも室町時代以降は、河川流や洪水による被害が少ない比較的安定した土地であったのかも知れない。

この地域に居住した人々の存在を示す遺物としては、先述の応永年間の板石塔婆が最古のもので、これより古い時代については知られていない。多野藤岡地方誌(1976)には、新町の町名の由来について、次の記述がある。

「古くは東から南の一带が上野国緑野<sup>みどの</sup>(原典ママ)郡笛木村、西から北にかけてが下落合村であった。下落合とは神流川が烏川に合流するところなので、これに由来する名称であろう。下落合に対しては旧美土里村(藤岡市)に大字上落合があるが、中山道が開通してからは下落合といわず、単に落合といい、落合新宿または落合新町といった。」

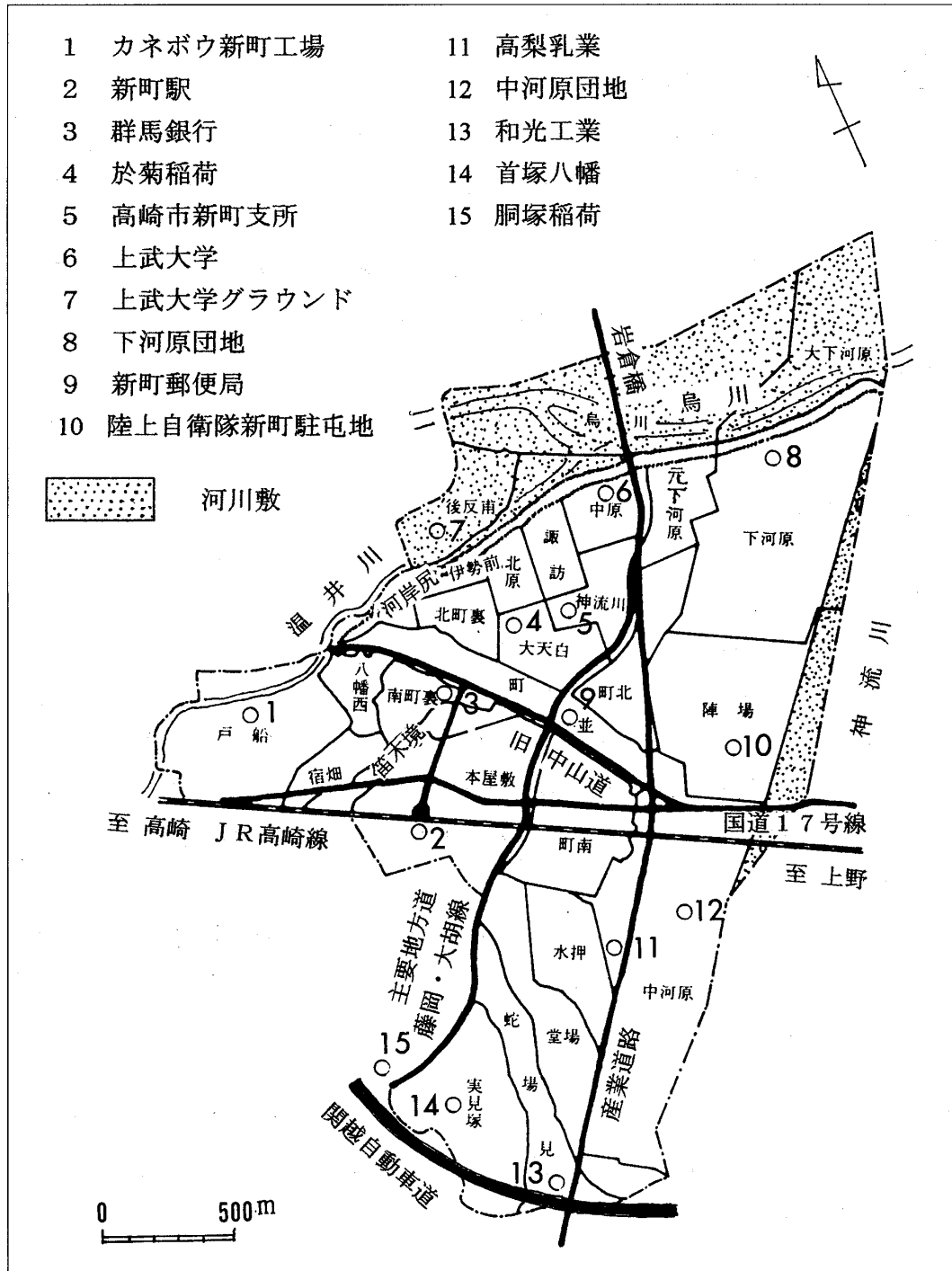
このように新町宿は落合村と笛木村が合体してできた宿場であった。実際には江戸時代を通して、両村の独立性は高かったようである。地元に残る古文書・古記録には、新町宿とせずに、「落合新町」「笛木新町」と区分されているものが多い。

## V 古絵図に見る神流川下流の河道変遷

江戸時代には測量技術が未発達であったため、古絵図から得られる情報は限られるが、地域を限定し、土地の特徴や建造物・道などの記載量が多いものは研究資料としての価値が高い。

新町地域の神流川を描いた古絵図の中から河道位置を推定できるもの(江戸時代中期)を

図3 新町の旧小字区分



大正6年(1917年)に区制が施行されるまで使われていた小字には、「陣馬」、「実見塚」、「元屋敷」などの歴史に由来する地名とともに、「神流川」、「中河原」、「下河原」、「水押」、「蛇場見\*」などの河川に関係する地名も多い。

\*鮎川には、浸食地形を表す「蛇食」がある(尾崎、1987)。

[新町町史編纂委員会(1989)に加筆、一部訂正]



選び、経年的な変化を辿った。次に各絵図を年代別に見てゆくことにする。

## 1 元文3年(1738年)の絵図(図4)

この図は、絵図が描かれた前年の元文2年(1736年)に発生した神流川の大洪水で、新町宿が受けた被害状況を代官に報告するために作成されたもので、蛇行した本流と本流から発生した分流・溢水流が描かれている。

神流川本流は大きく西に向けて蛇行しているが、直線的な流れもあり、曲流して戻って来た部分との間をつないでいる。両方の流れに幅の差があまりないが、曲流部の方が少し広く「神流川」の文字が記されていることから、こちらが本流なのであろう。

本流は大きく屈曲した後に左岸から分流を生じさせ、この分流は北に向かう本流に戻るが、途中で溢水させている。

溢水した水は幅を狭めて北へ向かう流れとなり、新町宿(図のA「上州緑埜郡笛木新町」)の東端を掠めて中山道を横断し、そのまま北方へ流れる。一方、本流も中山道を横断して、幅広い流れのまま北方へ流れる。

図には新町宿の南で本流から分かれた流れに設置した水防工事が詳しく描き込まれている。まず、流れの分岐点に、木と石を三角形に組んだ合掌杵のような水制工を横断させ、これより先の分流の左岸を蛇籠で護岸している。さらに溢水部にも長い工作物を横切らせ、分流が本流に戻る合流点にも合掌杵様の工作物で水勢を弱めようとしている。合流点から先の本流左岸にも蛇籠を置いて護岸している。また、溢水流が新町宿を掠める部分にも護岸が施されている。

さらに、本流が中山道を横断する箇所(B)には、「長さ70間(約136.5m)にわたり蛇籠と乱杭で(街道を)護っていたが、この洪水で押し流されてしまった」と書いた貼り紙が付けられている。

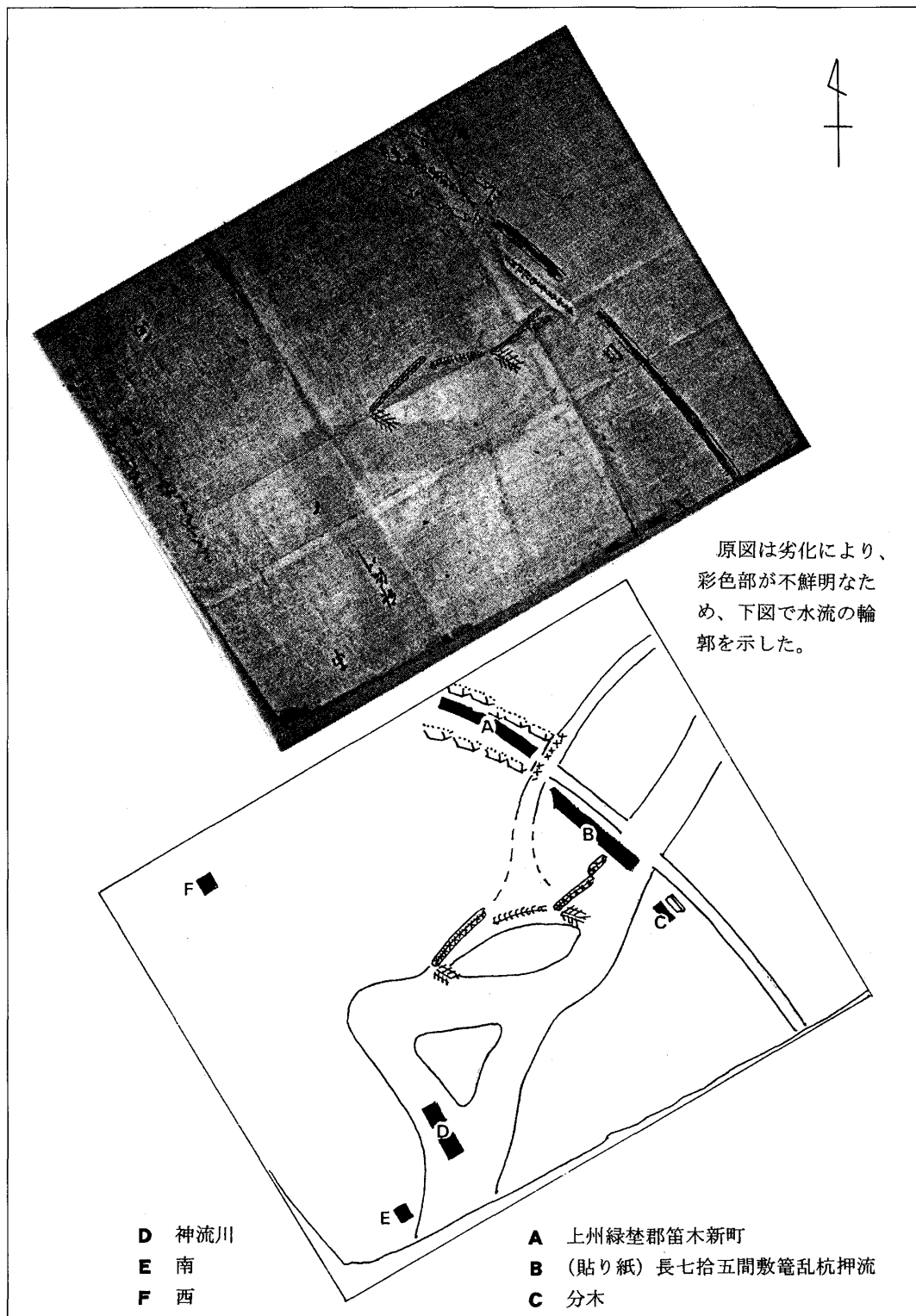
## 2 延享2年(1745年)の絵図(図5)

この図には、右下に「上州緑埜郡落合新町」と書かれ、図の中央の街道(中山道、A)には、「中山道御伝馬宿落合新町宿」と記されている。新町宿西部とその周辺地域の土地状況を代官に報告するために作成された図である。

落合新町を中心に東西約2km、南北約500mの範囲で描かれている。図の西端から⑩の地点にかけての曲がりくねった二重の曲線が、貫井川(現在の温井川)であり、⑩から図の東端へ続く滑らかな曲線が、貫井川が注ぐ烏川の右岸であることが、河川名の表記により明らかである。

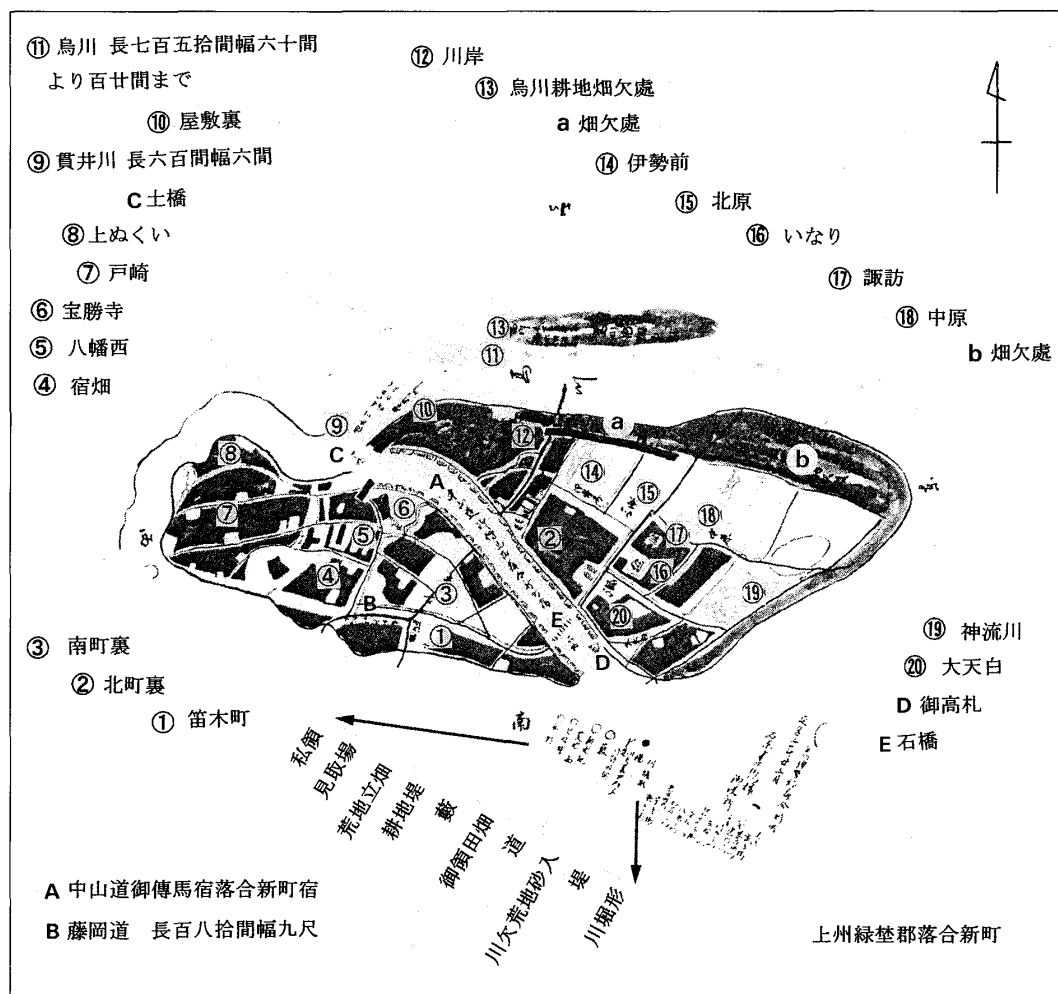
また、貫井川が囲む南側の土地(⑦付近)は、現在のカネボウ新町工場の敷地である。こ

図4 元文3年6月27日作成の絵図（川除普請絵図）



蛇行した神流川の分流に護岸・水制工事が行われている。新町宿では入口にのみ溢水流の防止工が施されている。

図5 延享2年5月「上州緑埜郡落合新町」の絵図 (川除普請絵図)



新町宿西半部 (現在の温井川にかかる弁天橋から行在所公園東の高札場跡までの間) とその周辺が描かれている。図中の⑲神流川は小字名であり、河川名ではない。

れより中山道の東端に続く、図の南縁を限る線は、JR 新町駅西の七曲り公園から新町商工会館 (③付近) を経て、橋場町に至る線である。

中山道東端には、高札場 (図中の D「御高札」) と石橋 (図中の E、街道を横断する用水路に架けられた小さな石製の橋) があり、さらに、高札場の北には⑳「大天白」の文字がある。これらのことから、ここが現在の行在所公園の交差点付近であることがわかる。

高札場より北東方へ向かう線は、「神流川」の文字 (⑲) の側を通って烏川まで続く。「神流川」は、川に付けたものではなく、現在の新町役場付近を指し、小字名としてかつて使われていた地名である。

高札場より続く線は⑲「神流川」の東側を通り、烏川右岸の線につながる。西に屈曲した曲線の内側の土地 (b 東方) が、現在の上武大学高崎キャンパスの敷地である。

図の右下には色分けされた土地の凡例があり、「御領田畑」、「藪」、「耕地堤」などの土地利

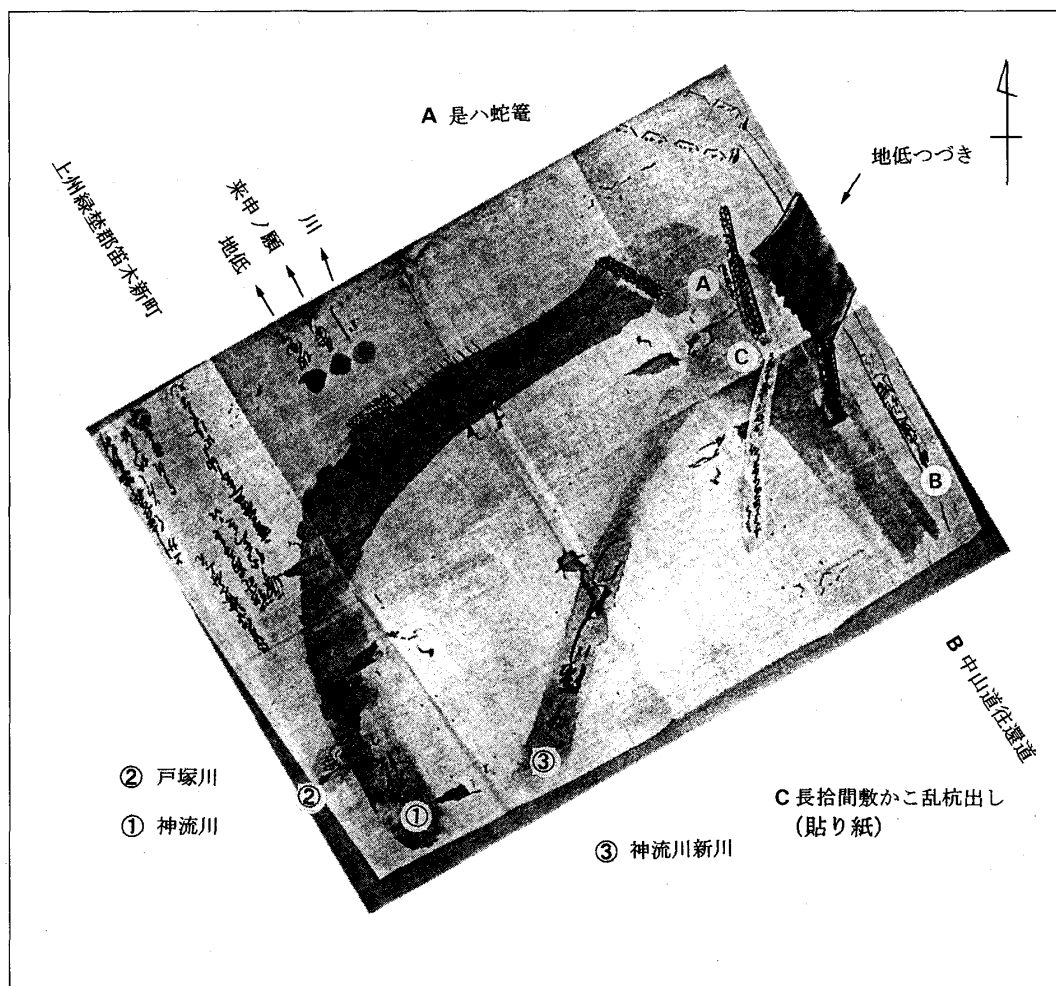
用とともに、「川欠荒地砂入」の洪水被害を受けた土地も区分されている。

新町宿の西側の貫井川を渡る橋（現在の弁天橋）の両側沿岸に護岸工が設置され、貫井川の氾濫から宿の入口を守ろうとしていることがわかる。これより東の烏川の流れが襲う岸（現在は温井川沿岸）にも、長い護岸が施されている。しかし、これらの護岸工事の前の土地には「畑欠所」と記されていて、既に畑が失われていたようである。

### 3 宝暦2年(1752年)の絵図(図6)

この図は新町宿東部笛木新町(図には「上州緑埜郡笛木新町」)の洪水被害を代官に報告するために作成されたものである。

図6 宝暦2年4月23日「上州緑埜郡笛木新町」の絵図(川除普請絵図)



蛇行した神流川の川欠（河岸浸食）を護岸で防ぎ、導流工により流れを逸らせて、新町宿への接近を回避させている。短絡流路（神流川新川）も生じ、街道を突破しようと集中する流れを懸命に防ぐ様子が伺える。

神流川支流の戸塚川が本流に注ぐ辺りから新町宿東端付近にかけての神流川とその分流

が描かれている。

戸塚川は、藤岡市街南方の庚申山南斜面に水源を持ち、神流川と並走して北流する小河川である。現在は笹川と名を変えていて、途中上戸塚で温井川支流の中川に分水してから上越新幹線の鉄橋の南で神流川に注ぐ。しかし、当時は下流がさらに北に延びていたと思われる。

本図に描かれた神流川(①)は、現在とは全く異なる位置を流れている。西へ大きく張り出すように曲流し、新町宿東端に向けて流れる。一方、戸塚川合流点(②東方)の少し上流と思われる地点で、神流川から分流(分岐点は描かれていない)が生じていて、この流れも新町宿の東端を目指す。分流は本流のように曲がらずに直線的な流路を取っている。

本流より狭い幅で描かれた分流には、「神流川新川」(③)と記され、新しくできた流れであることが明示されている。神流川は、新町宿東端の南(図中A「是ハ蛇籠」と記されている辺り)で大きく東に屈曲した後に、「神流川新川」を合流させて、中山道(図中のB「中山道往還道」)に沿うように東に流れる。

この図で注目すべき点は、この屈曲部に近い所に黒く塗られた幅広い地帯が描かれている点である。この地帯は中山道を横断して北へ延び、その中程に「地低つづき」と記されている。これは過去に水流が通った後の低地帯が続くことを意味するのであろう。

また、本図でも各所に水防工事が行われていることが示されている。曲流する神流川本流の中程の左岸が護岸されていて、特に強い流れが当たる上流側に蛇籠を置き、下流側は簡単な工作物で浸食を防いでいる。新町宿の東端の手前では3基の蛇籠を斜めに突き出して、制水と導流を図り、その効果により流れが新町宿へ向かったり、「地低」地帯に侵入するのを阻止している。

#### 4 宝暦2年(1752年)以降? (年代不詳)の絵図(図7)

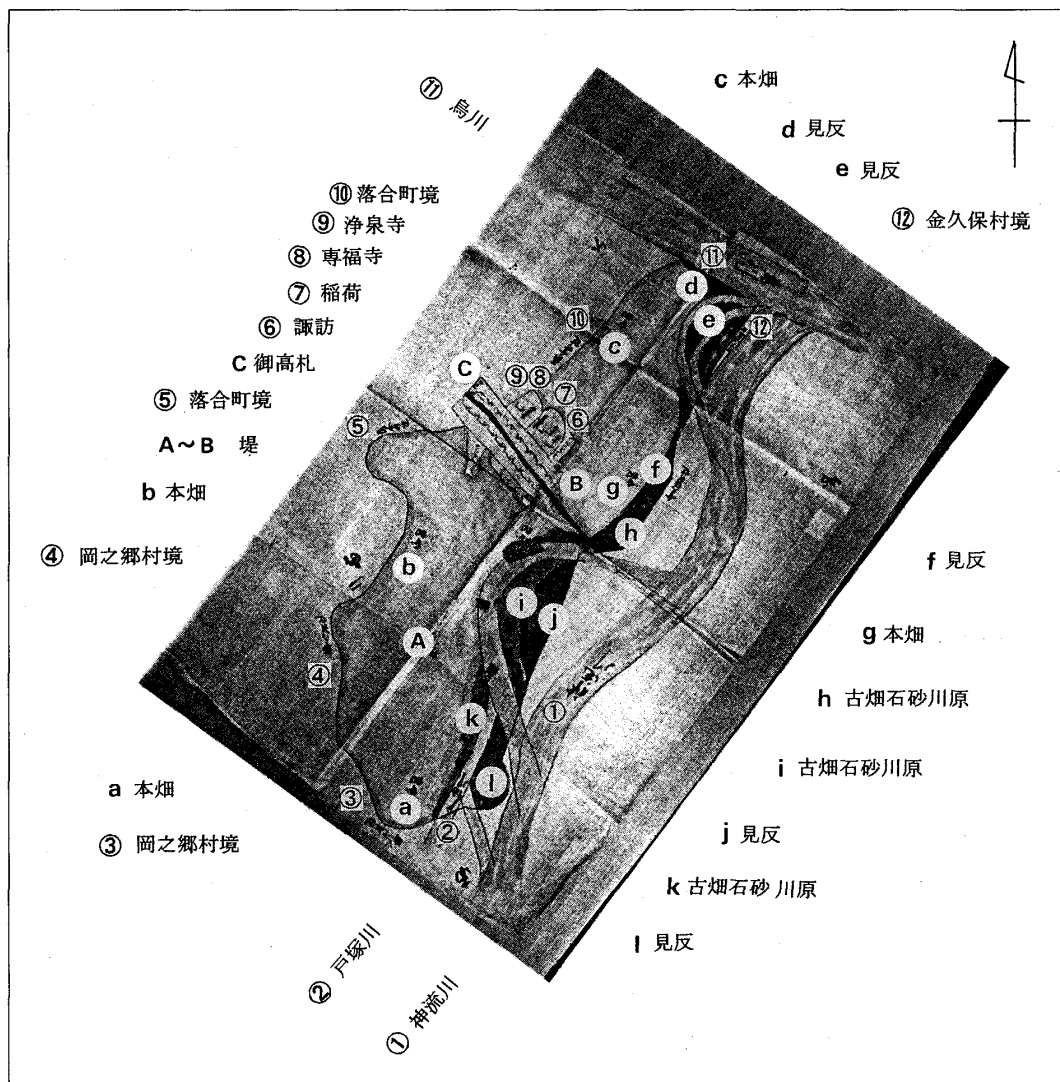
神流川の下流全体がよくわかる図であるが、残念なことに作成年代が記されていない。作成された目的は、やはり洪水の被害を届けるためと考えられる。

本図では宝暦2年(1752年)の図と同様に戸塚川合流点付近から始まるが、中山道より北の烏川に合流するまでの間も描かれていて、前掲のいずれの図よりも広い範囲が入っている。

この図でも神流川の曲流が見られるが、これとは別に直線的な流れもあり、北上して曲流部を再び合わせている。直線状流路の方が曲流の流路より幅が広く、前者に「神流川」と記されている。

戸塚川は本流からの分流を合流させた後に曲流を始めた分流に注ぐ。分流は宝暦2年(1752年)の曲流と同様の流路をとるが、中山道に近づく辺りでは、宝暦2年の時のような

図7 作成年月日不明 笛木新町の川除普請絵図



元文3年・宝暦2年の図とほぼ同範囲から烏川との合流点までの広範囲が描かれている。神流川本流は現河道に近い位置に移っているが、蛇行分流も存在する。

急激な屈曲はなく、滑らかな弧を描いて曲がる。分流は本流とともに、図中のh地点の南で中山道を横断し、その直後に両者は合流している。

その後、本流は烏川に注ぐ手前で再び西方へ分流を出す。この分流は2筋で、小さい二重の弧を描いて、本流と一緒に烏川に注いでいる。

洪水の被害は蛇行した分流に沿う地帯に多く出ている。「古畑石砂川原(砂礫が堆積した川原になってしまった畑)」や「見反(使用用途が定まらない土地<sup>みそれたり</sup>)」を区分している。宝暦2年の図(図6)の「地低」に相当すると見られる地帯も「古畑石砂川原」とされている。

【本図の作成年代の推定】

上流の曲流部の背後(新町宿側)に直線状の長い堤(A~B)が描かれている。これは元文

3年(1738年)の図(図4)に描かれた新町宿東端に向かう流れの流向に沿うように築かれている。このことから、堤は曲流部の決壊や溢水で生じる流れから宿を守るために築かれたと考えられる。

この堤は元文3年(1738年)の絵図には描かれていない。また、宝暦2年(1752年)の絵図(図6)にも堤はなく、宝暦2年の時に、中山道の手前で東方へ急転回する流れの一部と思われる部分が、本図では護岸の蛇籠のすぐ下流側に張り出し、「古畑石砂川原」として灰色に彩色されている(この部分に「古畑石砂川原」の表記はないが、他の表記のある同色の部分から判断)。

このことは、この絵図が作成された頃には護岸の効果のためか屈曲せずに、緩やかな弧に変わっていたとみることができる。以上の絵図の比較より、確定はできないが、本図は宝暦2年(1752年)より後に作成された可能性があるものと推定される。

## VI 空中写真と旧版地形図に見る神流川下流の河道変遷

空中写真を用いて、神流川の旧河道の判読を試みた。過去に撮影された空中写真のうち、旧河道の判読に有効なのは、昭和22年(1947年)に撮影されたものである。戦後の開発が進む前の土地の姿が写されていて、貴重な情報を得ることができる(図8)。

旧河道は田畑の配列と色調の違いによく現れていて、神流川の扇状地上に複数の蛇行流路跡を見出すことができる。田畑の境界、畦道や車道などのラインも、自然堤防や蛇行州(ポイントバー)の方向に従っている部分が多い。

また、旧河道はその幅が大小様々で、河道どうしが切ったり切られたりしている。時代を変えて本流、支流、分流が重なり合って形成したものである。

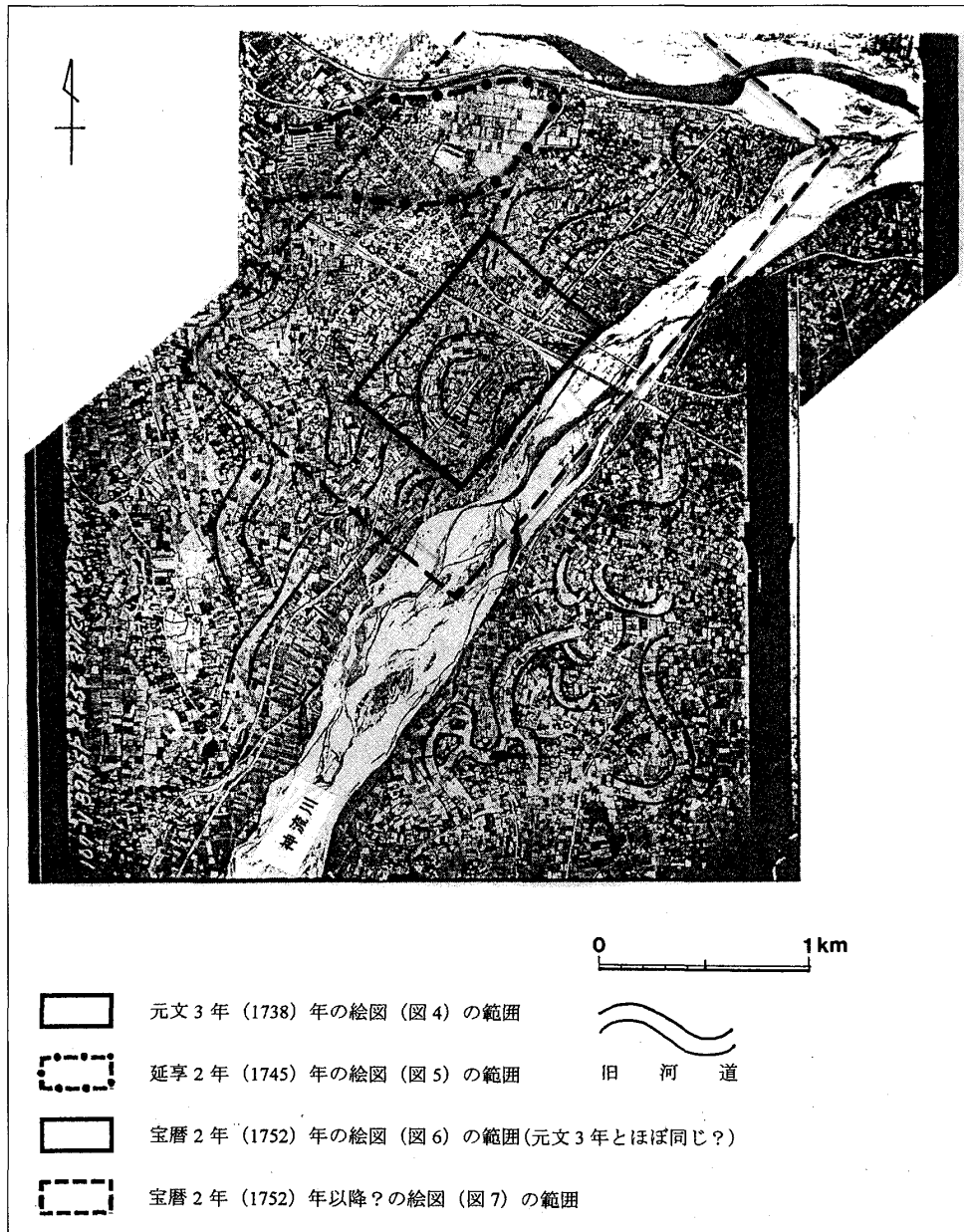
旧版地形図では、明治18年(1885年)の第一軍管地方二万分一迅速測図(迅速図)や明治42年(1909年)の2万分の1地形図などで、部分的ではあるが、旧河道地形が等高線の形に表れている。特に後者の等高線には、現在では消失している地表の起伏が表現されていて、当時の地形を復元することができる。

本稿の古絵図で対象としている江戸時代中期の河川の河道と推定される跡は、市街地を除けば比較的よく判読することが可能で、およその位置を知ることができた。

他の扇状地でも、江戸時代の河道についての研究が行われている。例えば、原田(1936)は黒部川扇状地の多数の分流路と江戸・明治時代の6回の大洪水との対応関係を示している。

現在の地表に何年くらい前までの旧河道が残るかについてはわからないが、本調査では少なくとも250年以上前に遡ることができる。しかし、後述する通り、古い時代の旧河道

図8 空中写真から判読できる神流川の旧河道



[昭和22年(1947年)撮影の写真(国土地理院)に加筆(太い曲線)]

は、一時的な水流の作用で形成されたのではなく、河道が移動しながら同一流路を繰り返し流れたために残ったと推定される。水流の通る頻度が大きく、新たな埋積による消失を免れた河道が残ると見てよいであろう。

それでは、河道はどの程度の頻度・速度で移動するのかという疑問が生じるが、この問題については研究例が少なく、原田(1936)を含め、未だ明らかにされていない(斉藤,1988)。



## VII 新町宿南方に存在した蛇行河道の現状

都市化と土地改変が進んだ現在は、古絵図に描かれた河道を現地で見ることはほとんどできない。しかし、江戸時代に新町宿を脅かした神流川の旧河道は、その一部が近年まで残っていた。また、洪水を防ぐために築かれた堤の一部は、現在もわずかながらその痕跡を見ることができる(図9)。

### 1 堤

国道17号線と産業道路が交わる交差点「自衛隊前」の北西角地に、国道より北北東に30mほど続く幅10mほどの狭小な畑地(D)がある。この土地は南側に続く斜面で、その形状から「宝暦2年以降?の絵図」(図7)に描かれている堤の一部と考えられる。

新町町誌編纂委員会(1989)には「八坂神社の南に見られる堤の一部」と簡単に触れられているが、この場所を指すものであろう。

明治18年の迅速図には、この堤の斜面と見られる直線状の低崖が、中山道鉄道(現在のJR高崎線)より南西方向に約400mの長さで描き込まれている。また、昭和22年(1947年)撮影の空中写真(図8)にも、100mほどであるが、堤の一部(図9のE)が写っている。

なお、昭和53年(1978年)に新町文化財調査委員会・新町公民館が作成した「新町宿町並図(江戸末期)」には、八坂神社(「自衛隊前」交差点の100m北)より南西に延びる「土堤」が描かれているほか、これに平行する「悪水ぬき」と記された水路も描かれている。

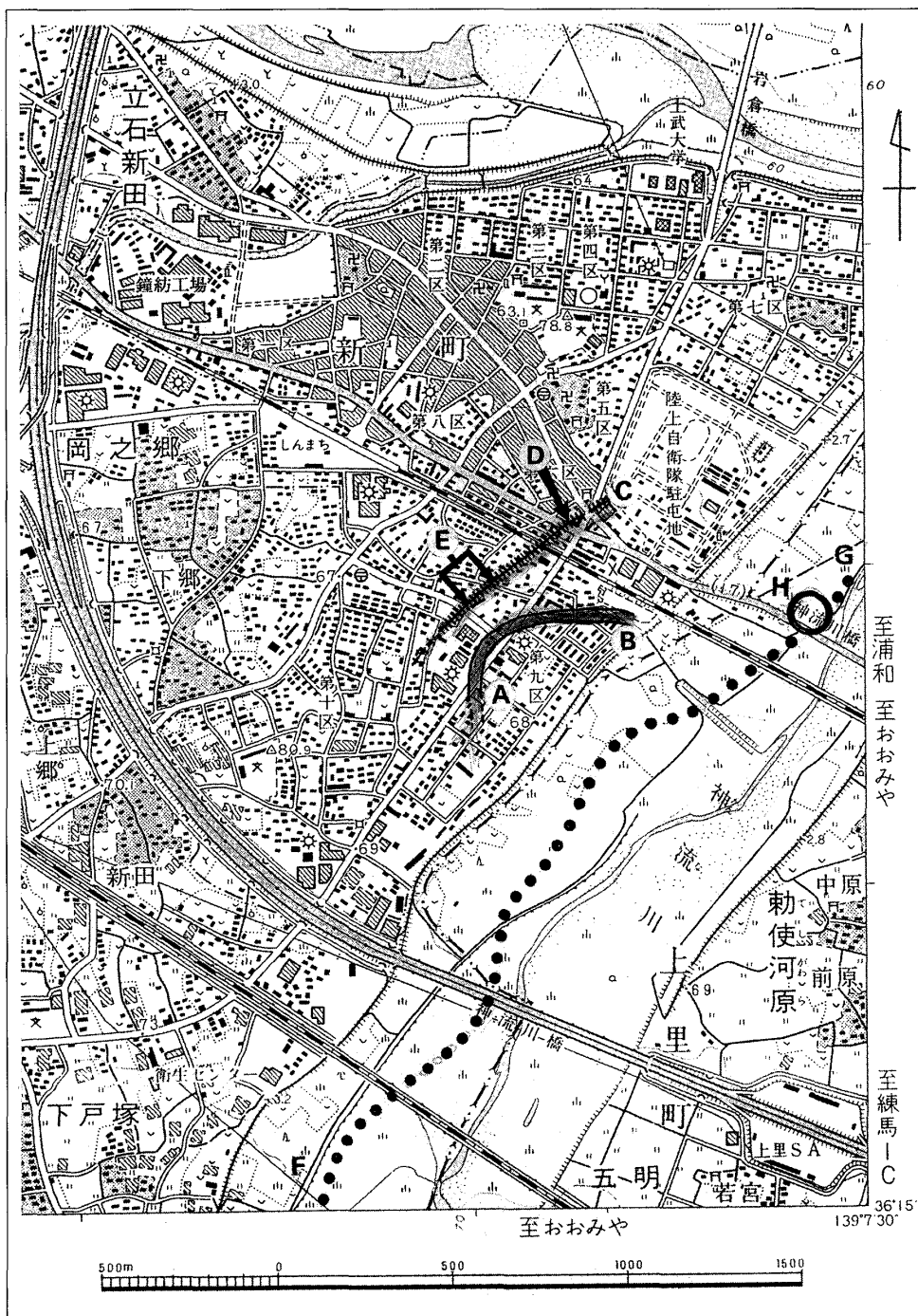
### 2 旧神流川蛇行河道

この堤跡より270mほど南、中河原団地と中河原保育園の間の東西方向の道と、この道を南西方向に弧を描いて曲げた延長曲線の位置(図9のA~B)に、かつて水路が存在した。

この水路は地元では「メイドブ」と呼ばれ、住民の話では「幅が12~13m、深さが3mほどあり、昔子どもたちが魚を獲って遊んでいた。」という。現在は宅地造成の結果、水路は消失しているが、昭和39年(1964年)と昭和45年(1970年)撮影の空中写真には、水路の一部が写っている。この水路は現在も部分的に地下排水路として利用され、JR高崎線鉄橋南の河川敷に延長され、神流川に放水している。

水路の位置は、江戸時代に神流川もしくは神流川分流が大きく蛇行した流路の一部である。前掲の絵図3点に描かれている決壊や溢流を防ぐための護岸工事をしていた曲流の淵にあたり、深く掘り込まれたため、近年まで永く残ったものと考えられる。

図9 新町宿に洪水被害を与えた神流川の河道（現在の地図上の位置）



- 江戸時代に繰り返し水防工事を行ったが、その痕跡はほとんど残っていない。
- A~B：神流川の曲流部（蛇籠などの護岸により、河岸の浸食を防いだ所で、本流が現在の位置へ移動した後も一部が昭和末まで残っていた）
- C：堤の北端（南端は不詳。全長600~700m？） D：現在残っている堤の跡
- E：空中写真（昭和22年）で確認できる堤の区間
- F~G：明治前期の神流川（本流）の左岸 H：旧「御陣場」の集落の位置

## VIII 江戸時代の神流川の河道と洪水

以上の通り、現在の地表からは、当時の地形を知る手がかりはほとんど得られないが、江戸時代に現在の中河原地区一帯は蛇行流が頻繁に流れた場所であったことは確かである。

絵図に描かれるのは、洪水被害があった時の状態なので、分流・溢水流は一時的な流れとみてよいであろう。それでは本流はどのくらい同じ位置にあったのだろうか。

神流川の本流が描かれている、元文3年(1738年)、宝暦2年(1752年)、宝暦2年以降?の3枚の絵図を使って、地形図上で本流の位置を検討してみた。使用した地形図は、土地の改変が進む前の地形がよく表されている「明治40年測図, 明治42年発行, 2万分の1地形図(陸地測量部)」の伊勢崎図幅および本庄図幅で、3枚の絵図に描かれている神流川の流路の位置をそれぞれ推定し、地形図上に重ねて比較した(図10)。

3枚の絵図のうち、元文3年と宝暦2年の絵図を比べると、神流川の本流は流路位置が多少異なるものの、両図ではともに大きく弧を描き、直線的な短絡流路を持つ点が共通している。

また、宝暦2年以降?の絵図では、ほぼ現在の位置に本流が移っているが、曲流部(この頃には分流)は依然存在し、しかもかなりの水量があるように見える。しかし、当時は前2者に描かれている短絡流路は、すでになくなっている。この図の年代は不明であるが、明治期にはほぼ現在の流路に変わっている。

従って、3者は数10年ほどの期間の変化の状態を表しているといえる。江戸中期よりさらに過去に遡って、この蛇行流路がいつ頃から始まったのかは知るすべがないが、少なくとも数10年以上の間は現河道位置(平成9年修正測量、2万5千分の1地形図「高崎」図幅の位置)より最大約800m、西に離れた位置を本流が流れていたといえる。

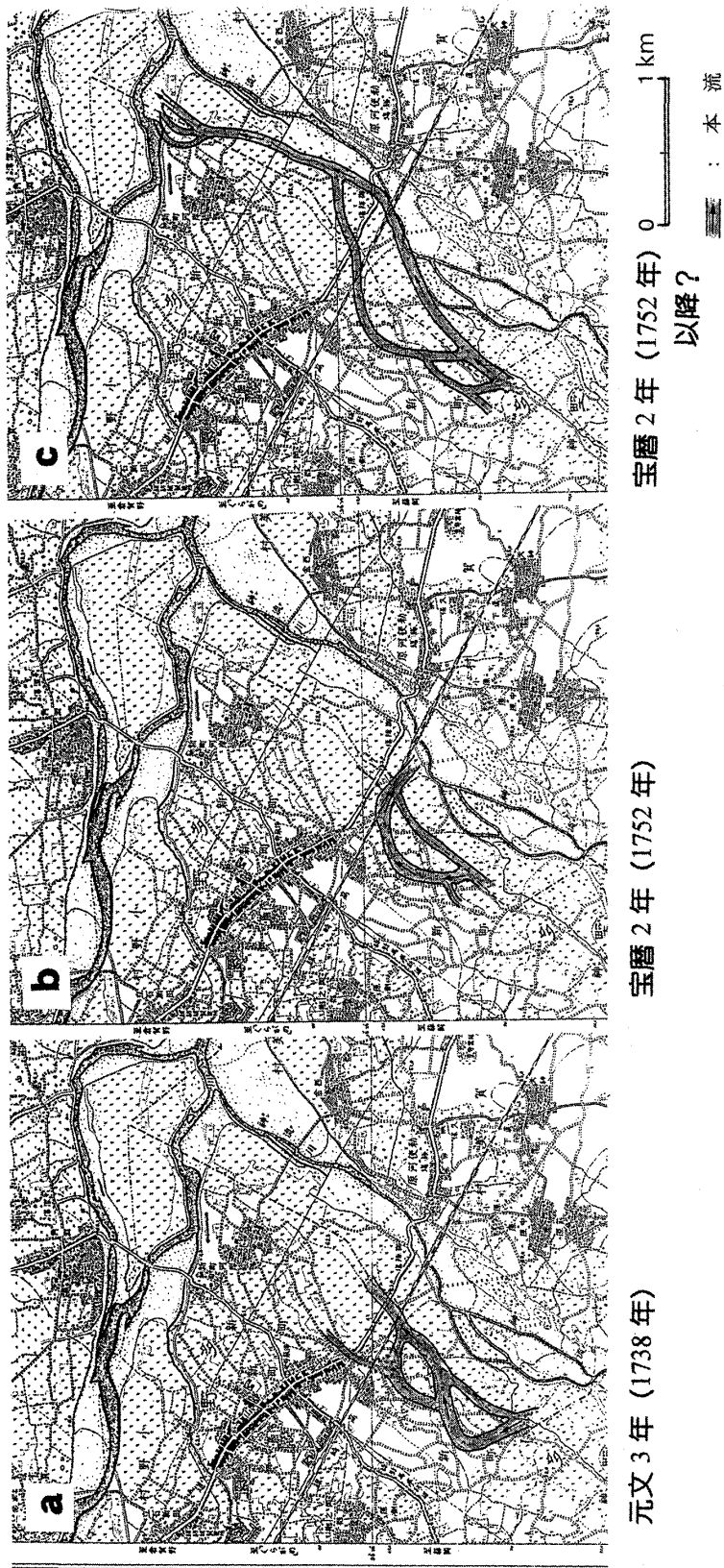
延享2年(1745年)の絵図(図5)にのみ神流川は描かれていないが、この図が描かれる3年前の寛保2年(1742年)には江戸時代最大の洪水と言われる「寛保の大洪水」が起きている。

寛保2年には、神流川の泥流が新町宿に流れ込み、97軒もの家を押し流し、54人に及ぶ死者を出している。この時に中山道が通行止めになった(新町町史編纂委員会, 1989)。この図(図5)は、このような大洪水後の落合新町宿とその周辺の状況を報告する目的で作成されたのであろう。

笛木新町(新町宿東部)については一切描かれていないのでわからないが、寛保の大洪水で神流川からの洪水流が激流となって押し寄せていたはずである。

空中写真(図8)には、陣場の手前で現河道の方に戻らずに北へ向かう旧河道が見られる。神流川から溢れた大量の水が、このような旧河道を辿って笛木新町の宿を襲ったことが推定される。

図10 江戸時代中期の新町宿付近における神流川の河道変遷



〔土地の人為改変が進む前の地形がよく表されている明治40年測図、明治42年発行2万分の1地形図(陸地測量部)を使用〕

## IX まとめ

神流川下流域の歴史は水害との闘いであった。江戸時代の新町宿もしばしば壊滅的な大洪水の被害を被りながらも、懸命な水防工事で街を守ろうとしている。本調査では当初の予想以上に、古記録から多くの事実を知ることが出来た。新町宿とその周辺地域に被害をもたらしてきた神流川の河道変遷について、得られた結果を以下にまとめる。

- 1 新町の神流川沿岸には古代以前の資料はないが、室町前期の人の居住を示す微高地もあり、旧河道の間には比較的安定した土地も残っている。
- 2 江戸時代中期には、神流川本流が新町宿がある台地上を蛇行しながら流れ、頻繁に周辺地域に洪水被害を与えている。
- 3 新町宿東部(笛木新町宿)の南に存在した神流川の曲流部からは、しばしば決壊による分流や溢水による流れが派生し、新町宿方面に押し出している。
- 4 江戸時代に繰り返し水防工事を行った曲流部は、その一部が溝状の地形として、昭和の末まで残っていたが、その後の土地改変により現在は見られない。
- 5 江戸時代の記録で見る限り、神流川は新町宿の南で数10年以上の間は、現河道より最大約800m西に離れた位置を蛇行して流れていた。

## X 課題

神流川の下流は、現在大規模な人工堤防に挟まれ、河道の移動を著しく制限されている。しかし、江戸時代には頻繁に流路を変えて、盛んに氾濫を繰り返す扇状地の河川としての本来の姿を見せていた。

本稿では、洪水被害との関係から、新町宿付近を中心に、江戸中期の神流川の河道変遷を扱ったが、他の地域・時代については今後の課題として残されている。

上里町でも、江戸時代に神流川の蛇行流路の移動や、長距離に及ぶ移動が生じたことが記録に見られる。また、烏川との合流点付近では、頻繁に地形が変わっている。その中には、度重なる水害のために、武州側から新町に全村移動を余儀なくされた例まである。

今後は、各地に残された記録や資料をもとに、広域的な視点から神流川の河道変遷の全貌を明らかにしたい。

## 謝辞

本稿の調査にあたり、高崎市新町公民館の職員の方々には、高崎市と多野郡新町の合併

(平成18年1月)に伴う館の移転作業中にも拘わらず、時間をかけて多くの貴重な資料を捜していただき、使用を快諾していただいた。

また、新町第九区の住民の方からは、旧河道跡の水路が残っていた頃の参考になるお話を伺うことができた。

ここに記して、以上のご協力いただいた方々に謝意を表する。

### 参考文献

- 岡之郷・郷土誌編集委員会 1996.『藤岡市岡之郷・郷土誌』.  
尾崎喜左雄 1987.『日本歴史地名体系第10巻 群馬県の地名』平凡社.  
斉藤享治 1988.『日本の扇状地』古今書院.  
新町町誌編纂委員会 1989.『新町町誌通史編』新町教育委員会.  
多野藤岡地方誌編集委員会 1976.『多野藤岡地方誌』.  
原田 清 1936.『修補富山県地誌』中田書店.

### 参考資料

- 上里町史編集専門委員会 1996.『上里町史通史編上巻』上里町.  
群馬県教育委員会 1982.『群馬県歴史の道調査報告書第11巻 歴史の道調査報告書 中山道』.  
群馬県多野郡新町文化財調査委員 1984.『新町の文化財』新町公民館.  
群馬県・前橋地方気象台 1982.『群馬県気象災害史』.  
玉村町誌刊行委員会 1994～2000.『玉村町誌別巻Ⅳ～Ⅷ 三右衛門日記(一)～(五)』玉村町.  
玉村町誌編集委員会 1993.『玉村町誌通史編上巻』玉村町.  
鶴見祐輔・茂木伝八・笛木玄次郎監修(執筆者不明) 執筆年代不明.『毘沙吐誌資料編年譜上巻・中巻・下巻』(手記, 高崎市新町公民館蔵).

### (古文書)

田口 基家文書(群馬県立文書館蔵)

- 39 書付以奉願上候  
77～79 水防計覧細弁  
188-4 差上申一札之事  
213 川除御普請御用  
216-2 [神流川筋川除御普請粗絵図]  
216-3 [神流川筋川除御普請粗絵図]  
216-4 [神流川筋川除御普請粗絵図]

小林繁治家文書(群馬県立文書館蔵)

- 8 [中山道落合新町宿周辺絵図]

10 [中山道新町宿粗絵図]

(地形図)

参謀本部陸軍部測量局 1885. 第一軍管地方二万分一迅速測図「群馬県地域G6」

陸地測量部 1909. 二万分一地形図「伊勢崎」図幅

陸地測量部 1909. 二万分一地形図「本庄」図幅

陸地測量部 1932. 二万五千分一地形図「高崎」図幅

陸地測量部 1932. 二万五千分一地形図「伊勢崎」図幅

地理調査所 1955. 二万五千分一地形図「高崎」図幅

地理調査所 1955. 二万五千分一地形図「伊勢崎」図幅

国土地理院 1967. 1:25,000地形図「高崎」図幅

国土地理院 1967. 1:25,000地形図「伊勢崎」図幅

国土地理院 1976. 1:25,000地形図「高崎」図幅

国土地理院 1976. 1:25,000地形図「伊勢崎」図幅

国土地理院 1989. 1:25,000地形図「高崎」図幅

国土地理院 1989. 1:25,000地形図「伊勢崎」図幅

国土地理院 1998. 1:25,000地形図「高崎」図幅

国土地理院 1998. 1:25,000地形図「伊勢崎」図幅

国土地理院 1998. 1:50,000地形図「高崎」図幅

(空中写真)

国土地理院 1947. R256 No.1,78~79

国土地理院 1947. R256 No.1,106~107

国土地理院 1960. KT-60-A 利根AW, A+20-1,3627

国土地理院 1960. KT-60-A 利根AW, A+21-1,3655

国土地理院 1964. KT-64-7X, C10,18

国土地理院 1970. KT-70-2X, C10,19

国土地理院 1974. CKT-74-18, C-38,21

国土地理院 1980. CKT-80-1, C12,17